

紅玉
Kougyoku
Iduki
いづき

1

サエズリ図書館のワルツさん





サエズリ図書館のワルツさん

1

紅玉
いづき

Kougyoku
Iduki



悪魔の笑い声のように、世にも不快な音を聞いた。

「あつ……！」

慌ててブレーキを踏み込み、ハンドルに突つ伏す。肩で切りそろえた髪が揺れて、ハンドルに触れた。振り返りたくなかつた。

なんてついてない日、と、青い小型自家用車の運転席で硬直した上緒カミオさんは心の中で毒づいた。そう、今日は朝からついてなかつた。朝のニュースの星占いは最下位だつた。チャンネルを変えたら血液型占いも最下位だつた。おうし座のA型は早朝から最悪

を運命づけられた。ばつかじやないの、と腹を立てながら化粧けしょうをして家を出たら、せつかくつくつた弁当を玄関先に忘れてきた。せつかくの、上緒さんのアスパラベーコンがぱあだつた。会社の食堂の自販機で買った乾いたパンを食べたらちょつと泣きたくなつた。

上緒さんの課のお局さまの機嫌つきわは最悪で、午後の業務開始十五分で盛大に八つ当たりをされた。上緒さんは悪くなかった、はずだ。女子トイレの個室でちょっと泣いた。

くたくたに疲れてやつてられなくて、残業を半ばに放り出してどうしても、身体からだに悪いファストフードが食べなくなつた。アスパラベーコンのことは、考えたくなかつた。なのにフライドチキ

ンの店は駐車場が満車だつた。店内は空席だつてあるつていうのに、なんてついてない！

そのまま帰るといろんなものに負けたことになるような気がして、上緒さんは隣の施設に無断駐車をすることにした。路駐の取り締まりなんてどうでもいいけれど、最近はガソリン泥棒だつて横行しているのだと、カーラジオのFMは呼びかけてくる。

ガソリン泥棒だなんて。こんな田舎いなかに無縁の心配だと思ひながらも、これ以上ついてないことが続いては敵かなわないと、振り切るように選局のボタンを一押し。リチャード・クレイダーマンのピアノに合わせて、天気予報に電気予報、空もエネルギーもぼちぼちだと声の綺麗きれいなアナウンサーが伝えてくれる。そうだ、ぼちぼ

ちだ。そのはずだと思いながら、ハンドルを切る。

停めようとしたのがなんの施設かすぐにはわからなかつたけれど、公共施設なら駐車場は無料だろうし、帽子をぼうし目深にかぶつた警備員もいる。ずいぶん高齢の警備員のようだけど、いないよりは、マシだろう。無断駐車が露見して怒られることもないだろうと思つた。たかだかファストフードを食べる間だ。

おあつらえ向きにひとつ駐車スペースがあいていた。隣の車も自分の車も小型自家用車で全然余裕、だと思つたのに。

わずかにハンドルの切り方が悪かつた。心臓に悪い音を立てて、上緒さんの車と、もとから停まつていた車が触れあつた。そう言えば微笑ほほえましいけれど、至極しけつ一方的で逃げようもない、接触事故、

だつた。

街灯はついていたけれど、辺りはもう薄暗かつた。上緒さんは顔を上げて、半泣きになりながらぐつとハンドルを握り、心を決めてアクセルを踏み込もうと、した。

今度は不吉な音と、足下に不自然な衝撃がきた。嘘だ、と思いつながら頭を下げたら、無惨にもパンプスのヒールが折れていた。ヒールのある靴での運転は決していいことだとは思っていないけれど、働き始めて二年間、こんなことは一度もなかつた。

「うー……」

当て逃げをしようとしていたのを神様に見抜かれた気持ちになつて、そのまま車の中でハンドルに突っ伏した。心の中で神様か

らいくつ恨みをかつてゐるのか数えてみた。ほんのう煩惱の数は確か、百八つ。そうではなくて。

(とりあえず、当て逃げは、だめだわ……)

力尽きたようにそう思つて、他の車の邪魔にならないよう、かすかに車体をずらし、おぼつかない足取りで車を降りる。さつき目に留めた警備員を視線だけで探したが、もう仕事上がりの時間だつたのだろうか、見つけられなかつた。

夕焼けが照らす建物は大きく、丸いフォルムのガラス張り。中にはたくさんの棚が見える。二重扉になつてゐる、不思議なほど新しそうなその施設の入り口に立つてはじめて、上緒さんはその名前を知つた。

サエズリ図書館、という呑氣なプレートをしばらく見つめて、逃げるように入つた。

はじめて足を踏み入れた図書館は、清潔で、かいだことのないにおいがした。それが紙と糊のりのにおいだということは、上緒さんにはわからなかつた。どこか胸がつまるような、空腹を刺激するようななつかしさだつた。けれど満足に吸い込むこともなく、上緒さんは早足でカウンターに向かい、「すみません」と呼びかけた。カウンターにいた女性は「はい」と低い声で答えた。受付カウンターに座つてはいたけれど、受付嬢、と呼べるほど若い職員では

なかつた。真っ白の髪をおかっぱにして、銀のフレームの眼鏡をかけた目元には、はつきりとした皺^{しわ}が刻まれている。ハイネックのトップスと、制服なのだろう、かつちりとしたベストに身を包んでいた。

「すみません、あの」

緊張を振り切るように、噛みながら言^かう。

「今、駐車場で、停めてあつた車に、ちよつと、ぶつかつて……」

その言葉に、カウンターの図書館職員は控えめに眉^{まゆ}をあげて、驚きを示した。非難の言葉を受けるだろうかと怯^{おび}えていたが、相手はそれ以上顔色を変えることはなかつた。「それでは、そうですね、事務室の方に行きましょ^う」とやはり静かに低い声で言う

と、立ち上がりつて上緒さんの前を歩き出す。タイトなスカートに、黒のタイツを穿いていた。上緒さんは片方の足をつま先立ちにして、周りを見ないようにその後ろについていく。平日の夕食時だというのに館内にはちらほらと気配があった。

人がいる、ということが意外に思えた。同時に上緒さんは、自分が生まれてはじめて図書館という施設の内部を歩いているのだという事実をかみしめた。

上緒さんは決して本が好きな人間ではなかつた。親しむような生活も、生まれてこの方したことはなかつた。図書館という施設について、概念としてはもちろん知っていたが、自分には死ぬまで無縁のものと思っていた。学生の頃に教師に連れられ、かび臭

い図書室に何度か入ったぐらいで、本といいうものにろくに触つたこともなかつた。古くさくて、敷居が高く、好事家こうすいかが好むもの。

それが本に対する、上緒さんの印象だつた。自分の場違いさが嫌になつて、上緒さんは背中を丸めて、ひたすらつま先を見て歩いた。事務室、と女性が言つた場所は、図書館の奥にある大きくも小さくもない部屋だつた。十にも満たない、それぞれ端末の置かれた事務机と、応接用だらうかソファがある。そのソファに座るよう促され、上緒さんはまるで学生時代に戻つて、職員室に怒られにきたようだ、と思つた。

立つたままではなく、座つて怒られるんだから、覚悟をきめなければならぬ。憂鬱ゆううつに胸が重くなつた。

働きはじめてから車には乗っているけれど、相手がある事故を起こしたのはこれがはじめてだつた。警察を呼ばなくちゃいけないんだろうか、実家に電話をした方がいいんだろうか。ああ、きっと実家の母親はまた自分の注意力のなさを罵るに違いない。あなたつて子はどうしていつもそうなの。もう子つていう年でもないんだけどな。

もしも相手がやくざのような人だったらどうしよう。次から次に浮かぶ不吉な想像に頭の中がぐるぐるした。金曜日の夕方に、一休なをしてるんだろうと、自分の惨めを呪う気持ちにもなつた。案内してくれた図書館員は事務室のまた奥の階段から下をのぞいて、

「ワールツさん」

と呼ぶ。

(ワールツさん?)

不思議な響きの呼び名に、上緒さんの頭の中のぐるぐるが止まる
ると、下から「はーあいー」という返事と階段を上る音がした。
図書館員の女性はそれで自分の役目を終えたとばかりに、会釈を
してホールへ戻っていく。すぐに階段から現れたのは、今し方の
図書館員よりもずいぶん若い女性だつた。自分よりも少し上か、
下手をすれば同じくらいなのではないかと上緒さんはぼんやり思
う。やはりかつちりとした制服を着て、長い髪を首の後ろでまと
めている。眼鏡はしていない。やわらかで若々しい、けれど落ち

着きのある笑顔で言つた。

「こんにちは」

「あ、はい。こんにちは」

思わず上緒さんはそこをえていた。立ちあがるべきだつたの
かもしれない。けれど、折れたヒールが気になつて、タイミング
を逸いつしてしまつた。

女性は頭を下げて、ポケットから薄い名刺ケースを取り出すと、
最近では滅多に見ないような、シンプルな紙名刺をテーブルの上
に置いた。

割津唯ワルツユイ。他の肩書きより数ポイント大きな書体の名前が、まづ

目に入った。指で触ると、文字にはわずかな凹凸があつた。

「わたしは、ワルツと言います。サエズリ図書館の代表で、特別探索司書です」

「はあ……」

本という高尚な文化にはうとい上緒さんだつたから、ワルツさんの肩書きがよくわからなかつた。ただ、彼女の胸元にある名札を見て、美しい書体で『ワルツ』とだけ書かれているのを見るに、確かにワルツさんだ、と上緒さんは思つた。

ワルツさんは向かいに座り、上緒さんに笑いかける。

「どうされましたか？」

優しい笑顔に、なんとなく責められるような気持ちになつた。

プレゼントでもあげたら、素敵すてきな笑顔をくれそうな人だつた。で

も、上緒さんはプレゼントなんて持っていない。

「あの、事故を」

いつまでも躊躇ためらついていても仕方がない。勇気を出して、上緒さんは言つた。

「駐車場で、車を、ぶつけてしまつて……」

「まあ」

と、ワルツさんは形のよい眉を上げた。それから、「お怪我けがは
ありませんか?」と上緒さんに尋ねてくれた。

優しい口調だったから、泣きそうになつてしまつた。

「怪我は大丈夫だつたんですが……。隣の車に、ちょっと、こす
つてしまつて……」

「あら……」

それじやあ、警察を呼びましょう、と言われるのを覚悟して上緒さんが俯いていると、ワルツさんは頷いたようだつた。揺れる空氣で、上緒さんにはそれがわかつた。そして、言う。

「それじやあ、見に行きましょうか。駐車場」

そうして彼女は立ちあがつた。上緒さんも顔を上げる。ワルツさんは、上緒さんの見る限り、面倒なそぶりなんてかけらも見せなかつた。

立ちあがるとすぐに、ワルツさんは上緒さんのヒールに気づいて、下駄箱からサンダルを持つてきてくれた。古びた健康サンダルだつたけれど、上緒さんはありがたく借りた。

足元がしつかりすると、少しだけ気持ちが上向くなつて、自然と目線も上がつた。

外はもう日がかけついていたけれど、明るい館内だつた。二階、いや三階まで吹き抜けの高い天井に、送風機が回つている。館内は目に優しい少しくすんだ白を基調として、壁面はほとんどが、ガラスか書棚だった。何所か、二階へ上がる階段があり、エレベーターは透明な油圧式。カウンターの向かいにひとつだけ、地下へと降りる階段も目に入つた。

並んだ棚の天板は合成プラスチックで、汚れがつかないようにな塗装されている。並ぶ本はぴたりと整列していた。

当たり前のことなのだろうけれど、書棚インターフェイスで見

るよりももつと膨大な量の書物が、棚にびっしりと鎮座していた。それぞれの本には下部に記号と番号が書かれたラベルが貼られて、タグだけではない分類が成されていることがわかる。その背表紙に手を伸ばしたら、一体どんな固さなのだろうかと上緒さんは想像する。ぴったりと整列した様子が、なんだかおそれおおくて、読みもしない本には、触ろうという気持ちにはなれなかつたけれど。外に出ると、辺りは一層明るさが落ちていた。夕焼けの中でワルツさんと上緒さんは、事故現場に立つ。

当たり前のことだけれど、上緒さんの車はいい子で持ち主を待つていたし、青い塗装が少し傷ついているのも、そのままだつた。ワルツさんが二つの車の間を覗き込む。

「ここですか？　ああ、傷が」

「そうなんです」と上緒さんは身体を小さくした。
ワルツさんは頷く。

「見覚えのある車だから、きっとよくいらっしゃるお客様のものだわ。もう少し時間がはやかつたら、警備員さんの勤務時間内だつたんだけれど……今日は早上がりだから……」

「どなたのものか、わかりますか？」

上緒さんが尋ねると、ワルツさんは頷いた。

「わかりませんが、ちょっと探してみましょう」

「どうやつて？」

ここで待つていればいつかは持ち主が帰ってくるだろうし、そ

これまでこのまま？ それとも、迷子放送よろしく、あの静かな図書館に呼び出しをかけたりするんだろうか。それはなんだかとても気が引けるなと思つていたら。

「あ、本」

助手席に目を止めて、ワルツさんの顔がほころんだ。上緒さんも覗き込めば、確かに助手席に、一冊の本が置かれていた。赤い色のハードカバー。こちらから見える背表紙には分類を書いたラベルが貼られていなかつたから、個人所蔵のものだと上緒さんにわかる。

助手席に本。なるほど、図書館によく通うような人は、自分などとは違う人種だと上緒さんは思つた。けれどワルツさんは、も

つと違うことを思つたようだつた。

「歴史小説……。だとしたら、多分……」

ぶつぶつと呟^{つぶや}きながら、ワルツさんは歩き出す。その背中を、上緒さんが追う。ワルツさんはヒールのあるパンプスで、自動ドアをくぐりサエズリ図書館の中に戻ると、迷いなく貸し出しカウンターに近づき、身を乗り出した。

「ねえサトミさん、岩波さんって来てました?」

座っていたのは、先に上緒さんを事務室に案内してくれた受付の職員だった。その胸元をちらりと見れば、ワルツさんと同じ書体で、『サトミ』の文字。サトミさんはワルツさんの唐突な質問にも淡々と答えた。

「ええ、来てました」

「ビンゴ」とワルツさんは嬉しそうに言つて、重ねて聞いた。

「本つて、借りました?」

「ええ、さきほど」

「よかつた。最新の貸し出し状況を表示して下さい」

ワルツさんがほつとした顔をする。そして言い終わる前に、サトミさんの節くれが目立つ、爪の磨かれた指が動き、なにかの情報的画面に表示した。ワルツさんは乗り出した身体の角度をかえて、一瞬それを覗く。プライバシーの問題もあるのだろう。ディスプレイの正面からしか文字は判別出来ないようになつていたから、上緒さんには、どんな本のタイトルが表示されているのか見

ることは出来なかつた。

「問題ありません」

ワルツさんは頷くと、今度は静まりかえった館内へと歩き出す。上緒さんは慌ててそれを追つた。一体なにをどうするつもりなのか。注意深く、その姿勢のよい背中を見つめていたが、ワルツさんはなにを、どうも、しなかつた。

ガラスの壁に面した階段をのぼり、ソファのある明るい窓辺へ。そこに、ねずみ色のツナギを着たおじいさんが、傍らに本を積んで座つていた。その膝には当然のように、分厚い書籍が開かれている。

「岩波さんー」

とワルツさんがおさえた声で呼びかけるので、上緒さんは少し驚いた。呼ばれた岩波の方はひょいっと本から顔をあげて。

「ほうい」

と一声答えてみせた。足早に近づいて、ワルツさんは言う。

「探しました」

「探されました、か」

「はい」

嘘だ、と上緒さんは背後で思う。ワルツさんは、絶対、岩波さんを探してなんていなかつた。常連さんだから、どこにいるかわかるのだろうか。どつちにしろ絶対、探してなんかない、と上緒さんは思うけれど、言わなかつた。

「どうしたね」

と岩波さんがワルツさんに尋ねる。ワルツさんは横に一步ずれると、綺麗な手首をひらりと上にして、上緒さんを示しながら岩波さんに言つた。

「こちらのお客さまの車が、駐車場で岩波さんの車と接触してしまつたそうで」

「ほ」

と岩波さんの口が丸く開いた。上緒さんは慌てて、勢いよく頭を下げる。

「すみません!!」

そのまま頭を上げられないでいると、上緒さんの頭のてっぺん

に、岩波さんの声がかかる。

「怪我は？」

驚いて、上緒さんが顔をあげる。中途半端に腰を折つたまま、ぶんぶんと左右に首を振ると、

「怪我がないならよかつた」

と岩波さんは笑つた。

情けないことだと思うけれど。

ぶわっと上緒さんの目に涙が浮かんで、しばらく顔が、上げられなかつた。

外はもうすでに薄暗くなっていた。冷たさを含む風と、虫の鳴く声が、そこかしこから聞こえてくる。

岩波さんは塗装の傷ついた自分の車をしげしげと見て、「自分でやつてみようか」と呟いた。いくら弁償することになるのかと、恐々としていた上緒さんは面食らう。

「自分で、つて」

「明日もいい天気だと言うからなあ」

岩波さんはそんな理由を述べた。そしてワルツさんに向き直る。「ワルツさん、車の補修の、本はあるかね」

「ありますとも」

自信に満ちた笑顔で、ワルツさんが頷く。

「どの辺りかな」

「一階右の庭側、F棚の右からこのくらいの、この辺り」

ワルツさんはよどみない口調で、左右に動かした手を、自分の
顎^{あご}辺りで止めた。

「『自家用車の補修整備』が一番新しい書籍です。戦^A後^P発行ですか
ら、わかりやすいかと思いますよ。製本もリングノートの形式で、
ふんだんに写真がのった初心者向けです」

よどみないこたえに上緒さんが啞^あ然^{ぜん}としていると、岩波さんは
笑つて、自分の手を、ワルツさんと同じ高さまで上げて言つた。
「この辺り、だな。見てみよう」

「是非」

につこりとワルツさんは笑つた。啞然としている上緒さんを、岩波さんが振り返つて言う。

「お嬢さん、よかつたら、明日朝、また図書館にいらつしやい」

「えつ」

「あんたの車の傷も、わしが直してみよう」

うまく出来るかはわからんがなあ。^{かか}呵々と笑いながら岩波さんが図書館に戻つていく。上緒さんのこたえも聞かずに。

確かに、そうしてもらえれば嬉しい、と上緒さんは思う。車の補修なんて、どこに行けばいいかわからない。D^{データベース} Bを調べてやり方がわかつたとしても、自分で出来る自信なんてない。だから、渡りに船の申し出、ではあるのだけれど。

想定外のことばかりで、上緒さんは呆然とするしかない。「明日来ていただけるのでしたら」と隣でワルツさんが微笑みながら言つた。

「履き物も、どうぞそのままお帰り下さい。明日でよろしいですよ」「あの」

先にお礼を言わなければならなかつただろうに、上緒さんの口をついて出たのは、不羨^{ぶしつけ}な問い合わせだつた。

「本……全部、覚えてるんですか?」

荒唐無稽^{こうとうむけい}なその言葉に、ワルツさんは笑う。

「まさか、全部は覚えていませんよ」

じやあ、なにを。どこまで……という上緒さんの問いは、ワル

ツさんの微笑みにかき消された。

「せつかくですから。本、借りていかれたらいかがですか？」

「え、でも」

そんな簡単に借りられるものだとは思わなかつたし、お金をと
られても困るし、そもそも、私、本を。

読んだことなんて、という言葉を告げることは出来なかつた。
だって、ここはどこだ？ 図書館の、駐車場じやないか。

「……はじめてなんです」

そんな間の抜けたことを言つたら、ワルツさんは笑つた。

「ようこそ。サエズリ図書館へ」

駐車場の外灯に照らされた、どこまでも、どこまでも優しく美

しい笑顔だつた。

貸し出しカウンターの隣、白い椅子に座ると、デスクはそのままディスプレイになつていて。『新規登録者用』との画面が表示されている。

「まず、この図書館は公共施設ではありません」

デスクを挟んで向かい合つた、ワルツさんのその言葉に、上緒さんは驚いた。

「サエズリ図書館の蔵書は過去の個人所有物の寄贈と、様々な協力会社の寄付からなりたっています。利用者の制限は特にありま

せん。身分証をお持ちになつて、利用者登録を済ませた方は、規約に同意したとみなし、どなたでもご利用いただけます」

私立だつたのか。しかもすべて無料だなんて。お金の心配を少なからずしていた上緒さんはとても意外な思いで、促されるまま運転免許証を出してリーダーに通した。先進時代のリーダーだつた。確かにこれは、公共施設では用意出来ないものなのかもしれない。技術 자체は珍しいものではないが、どこも財政難にあえぐ今の自治体で、これだけの設備を軽々しく投入することは難しいだろう、と一応企業向けの電子機器の会社で事務をしている上緒さんは思う。その間にも、ストレスを感じさせない速^{すみ}やかさで、住所や生年月日、個人端末情報^{プライバシーディーラ}が転載される。

「ありがとうございます。こちら、通常業務の範囲でのみ使用させていただき、外部へもらすことはありません」

よく聞く定型文を述べたあと、「サエズリ図書館の利用規約を説明いたします」とワルツさんの流れるような説明が続いた。

「図書の貸し出し期間は二週間。ひとり五冊までとなります。延長はネットワーク上から行えますが、四週間以上の延長は、一度図書館に向いていただいて借り直しという形をとらせていただきます。同一図書の貸し出し回数に制限はありませんが、予約者がある図書は、その限りではございません。予約者の有無はネットワーク上から確認していただけます。予約は一度に三冊まで。

新刊のリクエストに関しましては、お断りすることもありますが、

お気軽にどうぞ。カウンターまで申し出でいただくか、ネットワークでも受け付けております。また、休館日は毎週月曜日ですが、不測の停電等が長く続く場合、システム障害などがおこった場合は臨時休館をいただくこともあります。その場合は貸出期間が延長されます。カードに表示されますよ」

差しだされたカードは、薄い水色をしていた。名前と番号、それから液晶表示パネルが埋め込まれたシンブルなものだ。

「こちらが館内の地図となります。一階、二階は開架となつております、^{B.} 閲覧^{えちらん}は自由です。比較的新しい図書があります。地下は書庫となつており、戦前の古いものが主です。書庫には利用者登録を済ませ、カードをお持ちでしたら入室が出来ます。地下の一部は

閉架となつております、職員でないと入室出来ない場所がありますので、ご了承下さい。検索結果に閉架と書いてある場合は、一声おかげ下さいね。また、各棚に検

索端末を備え付けてあります。使用は自由です。もちろん、わからぬ場合はいつでもお尋ね下さい」

地図を見るも、なかなか実感がわかなかった。一階、二階、地下もあるとすれば、上緒さんは間違いなく、これまで生きてきた中で一番本がある空間に立つてになる。

「それでは最後に規約の中でも一番重要な部分にチェックをいれていただきます」

上緒さんの名前が入った利用者登録画面が切り替わり、ワルツ

さんはゆっくりと、いつそう丁寧な調子で口を開いた。

「当図書館には、特別探索司書が配備されています。当館の資料については、全て特別探索司書の管轄かんかつとなることをご了承下さい」
口調は丁寧だったが、上緒さんは首を傾げた。

「あのう、特別探索司書……って？」

その問いを予想していたのだろう。ワルツさんがまづげをおろし、形のよい唇くちびるでなめらかに説明をした。

「現在ではあまり耳にしなくなりましたから、ご存ぞんじないかもしれませんね。かつて国会図書館をはじめ、資料の保存を目的とした、特別な図書館の蔵書にマイクロチップが埋め込まれました。

その各図書情報の管理、特に位置情報へのアクセス権を認められ

た者を、特別探索司書と呼びます」

「ええと、つまり」

「つまり、当館で必要と判断した場合、貸し出しされたもの、されていないもの問わず、資料の位置情報を調べる場合がある、ということです。当図書館では紛失や破損による弁償を受け付けておりません。基本的に利用者の方に金銭を請求することはありますせんが、その代わり、なにがあつても、貸した図書は返していました」

なにがあつても。その言葉が重く、強烈に思えて、上緒さんは小さく息をのんだ。確かに全図書のチップが位置情報把握のために動作するのであれば、どこに本があつてもわかるだろう。同時に

に、先に感じた不可思議さにも説明がつく気がした。

本を借りた、岩波さんが、どこにいたのか。

貸し出し図書の位置情報を画面に表示すれば、岩波さんの居場所も、魔法のようにわかるということだ。

(つまり……)

目の前に佇む^{たたずむ}ワルツさんを見上げて、上緒さんは呟いた。

「——あなたが？」

「はい」

答えるワルツさんが、整った形の唇を持ち上げる。爪の美しい指先を、自分の胸元に。

「わたしがサエズリ図書館代表であり、特別探索司書です」

どこか誇らしげに、そう名乗った。

すべての登録が終わると、耳にやわらかなクラシック音楽が届いた。続くアナウンスは、閉館の三十分前を告げるもの。ワルツさんの声の録音だ、と上緒さんは思う。定時のアナウンスに、合成音ではなく録音を使うとは昨今珍しいと感心した。

「今日は、本、借りていかれますか?」

ワルツさんに尋ねられて、上緒さんは利用者カードを握りながらうろたえる。

「あの、なにか、オススメありますか?」

尋ねてから、自分はなにを言つているのだろう、と恥ずかしくなつた。オススメの本は、なんて。小学生が国語の先生に聞く感じもあるまいし。

けれどワルツさんはうろたえるような事はなかつた。

「これまで、読書の習慣は？」

「ええっと……あ、あんまり……」

恥ずかしそうに首を縮めながら呟く上緒さんに、ワルツさんは目を細める。

「そういう方、多いんですよ。今は活字といえばネットワークですものね」

非難でも落胆でもなく、自然なフォローのような、優しい口調

だつた。「わたしの好みでかまいませんか?」とワルツさんが尋ねる。

「は、はい!……出来ればあまり……難しくないものを……」「もちろんです」

言いながら、ワルツさんはすでに歩き出していた。その横顔がひどく楽しそうなので、上緒さんは不思議な気持ちになる。

なにがそんなに嬉しいのだろうか。利用者が増えれば、図書館の実績になるからだろうか。

「大人になつてから触れる絵本も格別ですが」

人がめつきり少なくなつたサエズリ図書館を歩きながら、ワルツさんが口を開く。

「あまり短い物語だと、本を読んだ、という気持ちにはなりません」

静かな図書館に、ワルツさんの声だけが響く。

「ノンフィクションやエッセイは相性や、普段の生活からの好みもありますし、普遍性^{ふへんせい}には欠けますね」

お仕事の帰りでしょう？　とワルツさんが上緒さんに尋ねる。いきなり問い合わせられて、上緒さんは背筋を伸ばして「はい」と返事をする。

「お疲れ様です。それでは、図書らしく、読書らしく、重みがあり、厚みがあり、それでいて遠くまで飛べる」

ワルツさんは低めの棚から、ハードカバーの一冊を取り出して、

言つた。

「長く読みつがれた、海外児童文学の愛蔵版です。読みやすいですよ」

山吹^{やまぶき}に近い色をした、カバーのない、固い表紙。指先に力をいれながら、その弾力を、上緒さんは不思議そうに確かめた。

生まれてはじめて手にする、図書館の本だった。

少々傷物になつてしまつた車を走らせ単身の集合住宅に帰り着くと、上緒さんはスーツをぬいで無造作にソファの上に投げた。

シャワーを浴びに風呂場に向かいながら、玄関先に置いた、ナイ

ロン袋入りの自分のパンバスを見て。

(仕事用の靴、買いにいかなきやな)

忘れないように、ナイロン袋はそのままにしておくことにした。
靴箱の中、地味なパンバスはあれ一足だけだつた。サンダルなんかで行つたら、お局さまになにを言われるかわからない。

シャワーを浴びて髪を乾かしながら、置いてきぼりの弁当箱をあけて、アスパラベーコンをつまんだ。秋口でまだ蒸し暑いが、傷んではいなかつた。そこでようやく、上緒さんは今日一日が、それほど悪いものじやなかつたかもしれないと思つた。

うん。しんどいことが多い一日だつたけれど、少なくとも、最悪なんかじやなかつた。

上緒さんは手を洗うと、仕事用の鞄を開いて、持ち帰った本を取り出した。

ソファに座つて、固い表紙をめくると、あのサエズリ図書館のにおいがした。なめらかな紙をなでて、インクの染みを確かめる。文字は焦げ茶だった。しおりの代わりになる、黄色い紐をなぞつたり、総ページを確認したり。しばらくそんな風にして、ようやく上緒さんは文字を追い始めた。

「……」

読みながら、うつぶせになり、仰向あおむけになり。

「……」

指先で文字をたどり、行つては戻り、を繰り返かえし。物語の中、

時代と世界の説明は、上緒さんの現実と乖離かいりしそうで、最初が肝心だと思うのに、どれも頭に入らず苦労した。食べ慣れていないものを無理矢理口に入れる感触で、咀嚼そしゃくの仕方が見つからない。本文をつまんで、残りのページの分厚さを確かめながら、片眼をつむつて言つた。

「ながい……」

昔はそりやあ、読書感想文を書いたこともあるから、このくらいの文章は読んでいたのだろう。しかし、高校を出て働き始めてからは、物語を追うなんて機会はめつきりなくなってしまった。

事務職を始めてからは毎日文字に触れるも、せいぜいが一度に一画面程度。

終わるのだろうか、二週間で？　そのためには毎日何ページ読まないといけないのでだろう。ああ、頭が働かない……。いつの間にか、ソファに横になつたまま、上緒さんの意識はとろとろと溶けていった。

翌朝ソファの上で目を覚ました上緒さんは、掛けふとんといえば胸元に広がつた本が一冊あるだけ。身体のきしみを感じながらも着替えをすませ、普段よりも一段階ほど簡単に化粧をして、チヨコレートを数個食べると家を出た。休日の午前中から外に出るだなんて、滅多にないことだった。

サエズリ図書館に車を入れると、昨日も見かけた警備員さんが、肩を揺らしながらやつてきた。

「ああ、あんた」

入れ歯だろうか。^{ふめいりょう}不明瞭な発音で、窓を開けた上緒さんに言う。

「あんたはあつち。岩波さんが、来たら回してくれと、いうとつた」

軽く礼を言つて、指示された、車の少ない駐車場に停める。隣には岩波さんの車があり、すでに岩波さんは塗装に磨きをかけていた。昨日と同じ、ねずみ色のつなぎ。首に黒く汚れた手ぬぐいをかけて、厳つい顔を拭いている。

岩波さんの車のボンネットには、昨日借りたのだろう。車の整

備の本が一冊、開いたまま置かれていた。

「おはよう」

「おはようございます」

挨拶^{あいさつ}を交わして、上緒さんは車をのぞきこむ。助手席にまた、本が積まれているのが見えた。今度は図書館のラベルがついている。昨日館内で読んでいたものと同じ本だ、と思って、上緒さんは思わず声をあげていた。

「もう読まれたんですか!?」

「ん？」

岩波さんが顔をあげる。日に焼けた浅黒い肌に、髪と眉だけが白かった。

「ああ、半分はな」

「半分つて……」

一冊一冊は、上緒さんが借りた本よりも薄く感じられたが、それでも一日で読むなんて、しかも複数、昨日の夜に借りて！　上緒さんは、わけがわからない、と思つた。

すごすぎて、よくわからない。

「本つて」

不羨だとは思つたが、上緒さんは聞いていた。

「本つてどうやつたら、こんなにたくさん読めるんですか？」

岩波さんは丁寧に作業をしながら、顔をあげずに答える。

「好きになれば、読めるだろう」

「どうやつて好きになりますか？」

「そりゃあんた。面白ければ、好きになるだろう」

岩波さんは整備の本のページをめくろうとして、手を止め、首の手ぬぐいで指先を拭いた。その仕草に上緒さんが慌てて、一枚ページをめくつてあげる。

実家の祖父母をはやくしている上緒さんは、老人に慣れていない。皺の浮いた手が珍しかった。老いたそれは細い指かと思つたのに、短くがつしりと太くて、爪は濁(にご)つていたけれど、震えもせずに器用(きよう)に動くようだつた。

「本は読まないかい？」

上緒さんがページをめくる様子を見て、岩波さんが尋ねた。

「雑誌、とかなら……でも、それも携帯とか、ディスプレイが多
くて……」

上緒さんにとっては、雑誌を読むことは買い物をするのに近い
感覚だった。通販を多用しているからだろう。気に入ったものは
すぐに注文してしまうことにしている。時々流通が滞つとどこおて届かな
いこともあるけれど、上緒さんの住む町では買えないものも多い
のだ。

「同じことだし、違うことだ」

しゃがみなおしながら、岩波さんは言う。

「本にしかないもんもある。それがいいと思えば、本がよかろう」
本を読む人間が立派なわけではない、と岩波さんは、ひとりご

つようによつた。作業の手を止めることなく。

「わしは毎日本を読むがね、娘はわしの本好きを、贅沢趣味だと
渋い顔をしたし、端末映像やデータの方が万倍面白いと、何度も
言つたよ。それは正しいんだろうと、わしも思う」

続いて落ちた呟きは、悔いのようであつたし、諦めのようでも
あつた。

「行き過ぎた執心は病だ」
やまい

上緒さんは答えることが出来なかつた。確かにそうかもしけな
いと、思いもしたのだ。言葉を返せず佇む上緒さんに、もうしば
らくかかるから図書館の中で待つがよいよ、と岩波さんは言つて
くれた。

時間を潰すには、これ以上ない場所だから。

図書館のカウンターには、昨日と同じ白髪のサトミさんが座っていた。上緒さんがカウンターに近づくと「おはようございます」と事務的な挨拶で迎えてくれた。低い声はにこやかでもなんでもないので、威圧感を覚えてしまうのは仕方がないことだ。

「おはようございます。あの、ワルツさんは事務室ですか？」

借りた本は持つてこなかつたけれど、昨日借りたサンダルを返さねばならない。カウンターに差しだすわけにもいかないから、事務室に向かおうと尋ねたら、サトミさんはちらりと自分の腕を

見た。ベルトの細い、可愛い腕時計だった。綺麗に磨かれた爪といい、そういうのが好きなんだな、と上緒さんは思つた。そう思つたら、なんだか親近感がわいた。

腕時計を確認したのは一瞬。サトミさんは顔をあげる。

「この時間はまだ、配架と書棚整理にあたつているはずです。公開ホールのどこかにはいるはずですが、呼び出しをかけますか？」

「いえ！」

自分で探してみます、と言おうとして、ふと思いついて、上緒さんは聞いた。

「岩波さんを探した時のように、位置情報を見るんですか？」

その言葉に、サトミさんが視線をずらす。

「いえ。この図書館の特別探索司書はワルツさんだけですから、
私に書誌座標のアクセス権はありませんし、閲覧も出来ません」

それは、つまり。上緒さんが続けようとしたが、背後で自動ドアが開く音がして、他の客が現れたのだとわかる。

「こちらの端末には呼び出し機能がありますから、見つからなかつたら、またどうぞ」

「はい！」

上緒さんはそそくさと館内に足を踏み入れた。開館したばかりの図書館は人も少なく、すぐに会えるだろうと思っていたが、背の高い書棚が視界をふさいで、まるで迷路のようだった。探し人は、なかなか見つからない。

「……あ」

ようやく見つけた姿勢のいい後ろ姿にほつとする。声をかけるわけにもいかなくて、近づいていくけれど、ワルツさんは気づかない。どうやら立って、本を読んでいるようだつた。背後に立つても振り返つてくれないので、上緒さんは躊躇いがちに、口を開く。

「あのーワルツ、さん？」

「はい!?」

肩を揺らして、パタン、と本を閉じる大きな音とともに、ワルツさんが勢いをつけて振り返つた。胸には大事そうに、今読んでいた本を抱えている。

「ご、ごめんなさい」

あまりに驚いた様子に、逆に悪いことをした気持ちになつて、
上緒さんは思わず謝あやまつつていた。

「あ、えつと」

硬直していたワルツさんが、謝罪をうけて戸惑うように眼球を
ふるふると揺らし、それからぺこんと頭を下げる。

「こちらこそ、ごめんなさい……」

恥ずかしそうに、ワルツさんは頬ほおを染めた。その愛らしい様子
に、上緒さんは笑う。

「読書中でしたか？」

ワルツさんは、よけいに身体を小さくしながら、本を抱き直す。
「勤務中、なのですけど」

そこで、長い指を口元に。小さな声で、上緒さんに懇願した。

「サトミさんには、内緒にしておいて下さい」

小さな子供が叱られることに怯えるようで、上緒さんは笑つてしまつた。

「わかりました」

任せて下さい、と自分の胸を叩きながら、上緒さんは言う。
「やつぱり、本、好きなんですね」

なにを今更、というようなことだつた。けれど、仕事はいつも、
好きと直結するものではない。好きで仕方がない仕事につければ
それにまさるものはないけれど、世の中はいつだつて、思う通り
には運ばない。はじめた仕事を好きになるか、好きでもない仕事

を続けていくか。どちらかといえば後者な上緒さんは、ワルツさんを羨^{うらや}んだし、同時に素敵なことだと感激をした。

言われたワルツさんは、花がほころぶように笑って、言う。

「はい。この図書館の蔵書は、わたしの宝物です」

宝物とはまた、大仰な言葉だつたけれど、上緒さんは否定することはせず、頷くだけでこたえた。

「これ」

ナイロン袋に入つたサンダルを差しだして、頭を下げる。

「ありがとうございます。助かりました」

どういたしまして、とワルツさんが受け取る。今日の上緒さんは学生時代によく履いたスニーカーを靴箱から引っ張り出してき

ていた。

「本は読まれましたか？」

次に問い合わせられたのはそんなことだつた。昨日の今日といふ性急さに上緒さんは驚くと同時に笑つてしまつて、指で薄い隙間をつくりながら、

「まだ、ちょっとだけ」

と答えた。ワルツさんも自分の気の早さに気づいたのか、「そうですね」と眉を下げて笑うと首を傾げた。その仕草も愛らしかつた。

そんなワルツさんにも聞いてみよう、と上緒さんは思う。岩波さんに聞いたらよくわからなかつたので、また少し違う聞き方で。

「本を読む時の、コツとかって、ありますか？」

「コツ、ですか？」

ワルツさんはぱちぱちとまばたきをした。天然物の色の薄いまづげが、ぱさぱさと揺れて、音がしたような気がした。

「んー……」

そのままワルツさんは天井を見上げて、それから、ぱつと気づいたように、視線を戻して言つた。

「あ、トイレ」

「トイレ？」

上緒さんは面食らう。すると、ワルツさんは神妙に頷いた。しんみょう

「トイレには行つておくといいと思います。いいところで中断さ

れると、悔しいですから」

そういうことを聞きたかったわけではない。けれど、上緒さんは思わず笑ってしまった。

全然参考にはならなかつたけれど、その答えは素敵だなど、上緒さんは思つたのだ。端末は片手で使えるし防水加工もしてあるから場所を問わない。けれど本は、紙とインクだから不自由もあるし、場所も問うんだと思った。

わかりました、と上緒さんが答えると、ワルツさんがなにかに気づいたのか、軽く肩を揺らした。ポケットから取り出した端末に「あら。お客さんだわ」と呟くので、上緒さんはワルツさんの業務の邪魔をしていることに思い至る。

「すみません、お引き留めして」

「いいえ、とワルツさんは綺麗に笑った。胸に抱いたままだつた本を棚へ、丁寧に戻すと、

「それでは、よい読書を」

そう言い残し、去っていく。

よい読書。上緒さんがその言葉に驚いたのはきっと、読書に良し悪しがあるなんて思つたことがなかつたからだ。同時にもつと、神妙に読書と向き合わなければならぬのだなど背筋を伸ばした。そう、とりあえずトイレにでも行つて。

まだここで時間を潰すのだろうから、とにかく本を読んでみよう、と上緒さんは思う。靴を買いに行くのは、明日でもいい。

でも、なにを読めばいい？

まったく思いつかなかつたので、上緒さんは一歩前に出て、ワルツさんが抱いていた本をのぞいてみた。白い表紙に金の文字の、確か……。

これだ、と手にとつて、引き出してみようと力をかけて、手を止めた。

『脳外科の権威と肖像』……？

つていうと、なんだろう？

なんだかよくわからなかつたけれど、とりあえず、引き出した図書は上緒さんの手に重く、その内容もきつととびきり重いに違いない、ということだけはよくわかつた。わかつたのはそれだけ

だつたけれど。

よい読書への道は、上緒さんには厳しそうだつた。

天氣のいい休日でもあつたから、徐々に図書館の中は人が増えていった。目にとまるほとんどが上緒さんよりずっと年配の利用客で、時折小さな子供が視界に現れると、思わず視線で追つてしまふ。今駆けていった子供達は兄妹だろうか？ 追いかけるのも不審なので、上緒さんの中では疑問は疑問のままだつた。

利用客は図書館によく慣れているようで、めいめいに図書を借りたり探ししたり、読んだりしている。上緒さんはといえば、うろ

うろと書棚の隙間を歩きながら、本にも色々あるのだと、とても平凡なことを思つた。古い学術書や歴史書、文豪の書いた物語ばかりが本ではないのだ。

それぞれのジャンルの本は、これまで知つてゐる誰かを彷彿とさせた。もつと正確に言うならば、本は多くありすぎて、誰かを彷彿とさせるような本しか目にとまらなかつた。園芸の本を見て父を思つて、料理の本を見て母を思つて、歴史小説を見ては岩波さんを思い出した。図書館の歴史、という本が並ぶ棚で、上緒さんは足を止めた。

一冊取り出して、目次を見る。

『特別探索司書』という見出しを探して、ページをたぐつた。該

当の箇所には、司書の変遷とその種類、そして特別探索司書を定義する条文と、その権限について書かれていた。あとは、国立図書館を例にとり、データ運用の方法だ。

その内容は想像していたよりもずっと理系で、びっくりした。ワルツさんもこんなデータを取り扱っているのだろうなと、わからなりなりに感心して、書棚に戻した。

すると前を行く女性が、カードを機械に差し込み、自動扉をかけて階段を降りていくのが見えた。分厚い眼鏡によれたジャージを着た、野暮やぼつたい妙齡の女性だった。慌てて上緒さんが自分のカードを財布から取り出し、前を行く女性にならって同じように機械に差し込む。

ワルツさんから最初に説明を受けた。地下は書庫になつてゐる
といふ。入つてはみたいが、ひとりでは怖い。誰か知らない相手
とでも、連れだつていけるのならばと思いつつ切つた。

地下は古い図書がある、というワルツさんの説明を上緒さんは
覚えていた。地上にある以上の図書があるのかなと上緒さんは不
思議な気持ちになつた。

黒い滑り止めのついた急な階段を降りていくと、ふわっと上緒
さんの身体を外とは違う湿度が包んだ。館内全体の空調は管理が
行き届いていたが、それ以上にこの地下は最適な温度と湿度が保
たれているようだつた。人間の、ではない。本の、最適な温度と
湿度だ。

やわらかな湿度とともに、鼻の粘膜を刺激したのが、劣化をはじめた紙とインク、糊の匂いだつた。

その段にいたつて、これは本の匂いなのだ、ということに、上緒さんははじめて気づいたのだ。

(どうしよう、なんだか)

なつかしい、と思った。近しい場所には踏み込んだこともないのに、郷愁がこみあげる。そんな匂いだつた。

階段を降りると、そこはひどく閉じた世界だつた。地上を昼とするなら、地下は夜。自然光のない空間はより強い圧迫感があり、同時に静謐^{せいひつ}でもあつた。

息をひそめているようだ、と上緒さんは思う。地上よりも低い

天井、狭いスペースにしきつめられた本が音を吸収してしまうのだというからくりを、上緒さんは知らなかつた。けれど、地上の本が生きているなら、こここの本はまるで、眠る本だと上緒さんは思つた。

先を行つた女性はすでに木々のように生えた本棚の陰かげへと消えて、反響する小さな足音だけが上緒さんが孤独ではないのだと教えている。

上緒さんは一番近い棚を見た。木だ、と思う。多分、本物の木だ。木目の浮かんだ硬い素材はよく磨かれ、なめらかであたたかかつた。その側面をなぞりながら、彫り込まれて漆を塗られた文字をたどり、口に出していた。

「義昭ギショウ……文庫モンブ……？」

読み方には自信がなかつた。出版社の名前だらうか。聞いたことがないな、と上緒さんは思う。もちろん上緒さんが知つてゐる純粹な出版社なんて、そう数はなかつたけれど。

不思議だつたのは、上の本棚よりもずっと、地下の本は雑然と置かれていたことだつた。本の背表紙はきちんとあわせてあつたが、所々入りきらないのか、横に置かれて隙間にいれられたり、手前に積まれてゐる本もある。乱雑ではなく、むしろ自由を感じさせる置き方だつた。

「わあ……」

試しに一冊、持ち上げてみて、そのカバーの色あせた様子や、

焼けた紙色に驚いた。汚いとも思えたし、アンティークでいぶし銀、という印象も同時に持つた。

おじいちゃんのような本だ、と上緒さんは思う。

父母しか家族のいなかつた上緒さんには、馴染みの薄い、おじいちゃん。馴染みは薄いが、嫌いではない、そう思つた。

博物館に収められて、ケース越しでしか見られないようなものが、手の届く範囲にあるといふことが不思議だった。上緒さんは口を開けて本棚をたどつた。雑多に置かれた書籍達が、誰かを待つているような気がした。

その誰かは、もしかしたら自分かもしない。そう思つた時だつた。

「ぎや、」

足元のなにかに躓いた。棚の上部に手を伸ばすための、踏み台だつた。そう気づいた時には遅く、上緒さんはバランスを崩して本棚に手をついた。そこには積み上げられた本があり、あつとう間に大きな音を立てて数冊足元に落ちた。

「ぎやー！」

思わず声をあげて、上緒さんはしゃがみこむ。落ちた本は四冊。「あ、あ、あ」

慌てて拾い上げながら、上緒さんは真っ青になつた。ひときわ古い一冊、そのハードカバーの表紙と中身が無惨にも離ればなれになつていた。

どうしようどうしようどうしよう！

頭の中は真っ白だった。

「おやおや」

悲鳴を聞きつけたのだろう。後ろから上緒さんをのぞいてそんなことを言つたのは、先に書庫へと降りていつた、眼鏡の女性だつた。長い黒髪をひとつにくくつて、眠そうな細い目をよけいに細くして上緒さんを見た。

「あの、あの!!」

涙をためて言うと、女性は「ここにいなさい」と上緒さんに言った。それはつきりとした言い方と、黒いふちの眼鏡とジャージも相まって、学校の先生みたいだと上緒さんは思つた。迷いなく

書庫の奥へと歩いていったのだから、もしかしたら本当に先生だつたのかもしれない。その婦人は「ワルツさんを呼んでくるから」そう言つて歩き出す。一度数歩戻ると、本棚の間から顔を出して、言う。

「逃げちゃだめよ」

ぴんつと上緒さんの背筋が伸びる。

逃げない。逃げたり、しない。駐車場の事故の時だって、逃げなかつたんだもの。

上緒さんは涙で揺れる視界の中で、脱皮するみたいに中身と表紙が外れてしまつた本を見た。よくよく読んではいなければ、宗教の本のようだつた。ほつれた糸がわびしかつた。壊れてしま

つた、と思った。壊してしまった。なんて取り返しのつかないことをしてしまったんだろう。ワルツさんはなんと言っていたつけ、弁償はないと言っていたんじやなかつたか。じやあ、一体、どうするんだろう。

書庫に敷かれた赤い絨じゅう毯たんに座り込んで途方とほうに暮れていたら、ぱたぱたと軽快な足音。

ひよいつと現れる、ワルツさんの顔を見たら、来るとわかつていたのに上緒さんの肩が怯えて揺れた。

「あの、あの、つまずいて、お、落として、しまって」

壊れた本を持つ手がぶるぶると震える。ワルツさんが黙つて手を差しだしたので、そこへ本と、それからはがれてしまつた表紙

を載せた。

「ごめんなさい……！」

涙はこぼれんばかりだった。ワルツさんが黙つて本を見て、それから軽く表情がかげるのがわかつた。わかつてしまつたから、やつぱり胸がしめつけられた。

「上緒さんつて」

急に名前を呼ばれてびっくりした。昨日会つて、登録をしたばかりなのに覚えていてくれたのだと思つた。自分には名札もないのに。昨日から迷惑をかけっぱなしだから、と思つた。

ワルツさんは小首をかしげて、綺麗な形の眉を上げながら言つた。
「もしかして、ちょっと、ドジですか？」

「ドジじゃないです！」

思わず叫んでいた。よく言われることだつたから。けれどすぐにはつとして言う。

「でも、ごめんなさい……!!」

ドジじゃなくとも、これは罵られても仕方ない、と思つた。怯えきつた顔でそう言うと、ワルツさんはふつと笑つた。

「はい」

頷いて、しゃがみこむと、ぽんぽんと上緒さんの肩を叩いて。

「大丈夫ですよ」

だからほら、立つて。と促される。上緒さんは憔悴しながらも、よろよろと立ちあがつた。ワルツさんは怒つてはいないようだつた。

「これくらいなら、わたしにも直せますし、もしも無理なら、お医者さんに来てもらうことにします」

「お医者さん……？」

上緒さんが問い合わせ返すと、にこっとワルツさんは笑って、誇らしげに言つた。

「本のお医者さんです」

修理のことだらうかと、おぼろげに上緒さんは思う。古文書にはその復元を専門にする人がいるそうだから、本にもまたそんな「お医者さん」がいてもおかしくない。車を直す人がいるようだ。また、やり方さえわかれれば岩波さんのように素人しろうとでも出来るのかもしねえ。

ワルツさんは、いつくしむようにまつげを伏せて、壊れた表紙をなでながら言う。

「ここにある本は古いのですから、こういうことも多いんです。もしも、壊れそうな本があつたら、教えて下さいね。修繕に回しておきますから」

上緒さんは、頷くことが精一杯だつた。どうしてもいたたまれなくて、もう一度「ごめんなさい」と言つた。「はい」とワルツさんは笑つた。上緒さんのこと責めはしなかつたけれど、あなたのせいではないとかばうこともなかつた。頷く、それが、許す行為のようだつた。

「上方で、岩波さんが戻つていらっしゃつてましたよ。車の修

復、終わつたのかもしません」

本が決まつたら昨日と同じところで読んでいるとおっしゃつて
いました。どうぞ、そちらへ。そうワルツさんは上緒さんに告げ
て、落ちた本をきちんととあつた場所に戻し、壊れものの本を
抱きしめて、奥の方に行つてしまつた。

奥に、利用客の使うものとは違う、事務室の方に続く階段があ
るようだつた。

背筋がまつすぐの、ワルツさんの背中を見ながら、上緒さんは
途方に暮れたようにひとりぼっち、呼吸する古書の森の中で佇んでいた。

上緒さんのブルーの車は、綺麗に直った。

傷があつたことなんて気づかないほどだった。それから、ぴかぴかの車体になつた。お医者さんよりすごい、と上緒さんはとんちんかんなことを思つた。

その段にいたつて、上緒さんは岩波さんに、なんのお礼も用意していない、ということに気づいたのだ。お礼以前に、お詫びの品さえ用意していない。

「この！　お礼は改めて！」

「いいよ。ついでだから」

そのついでだって、上緒さんが巻き込んだものだった。なんら

かのお礼とお詫びはせねばならない、と上緒さんは思う。でも、たとえばお金は、絶対に受け取ってくれないだろうという予感があつた。改めてだ、と思う。連絡先をきくのもはばかられたので。

「また、図書館にきますか？」

上緒さんが聞くと。岩波さんは頷いた。

「そりやそうだろう。借りた本は、返さにやならん」

まつたくその通りだった。本当にそうだった。

「じゃあまたここで」

「はい、ここで」

そして上緒さんは再会を約束して、ぴかぴかのブルーの車に乗つて帰った。どちらかといえばブルーな休日だつたけれど、それ

でもぴかぴかのブルーだつた。

新しい靴を履いた月曜日。おうし座のA型は、朝の運勢占いで
も抜群にラッキーな一日を運命づけられた。そのはずだつた。

ご機嫌に家を出た上緒さんは、仕事で大きなミスをした。ひど
く初歩的な、データ保存のミスだつた。上司とすれ違いがあり、
連絡が遅れたのがあだになつた。お昼休みいっぱいかかるつて復旧
した時には、トラブル処理として手をつける順番を間違えている
のだといふことに気づいた。

「一体なにしにきてるの？」

お局さまはいつもみたいな金切り声を出さなかつた。呆れかえつた低い声で、立ちつくす上緒さんに苛立いらだちをぶつけた。

「いつまでも、おうちのお嬢さんじやあ駄目だめなのよ」

やる気がないの？ それとも向いてないだけかしら。そう言われて、上緒さんの視界が揺れた。午後いっぱい、少しでも頭を揺らせば涙がこぼれそうだつた。その姿を、お局さまはうんざりした様子で見て。

「帰つていいわよ」

終業近く、ひどく冷たい声で言つた。

「今日はもういいわ。いてもらつても、空気が悪くなるだけだから」

その言葉に、上緒さんはなんと答えればよかつたのだろう。大

丈夫です。すみません。がんばります。でも、どの言葉も言えなかつた。

頭を下げて、「お先に失礼します」タイムカードを握つて、会社を出た。必死になつて走つて、ぴかぴかの、青い車に飛び込んだ。

「痛い」

思わず口をついて出た。足元を確認した。新しいパンプスが、上緒さんのかかとをえぐつていた。皮がむけて、赤い肌が見えた。合わなかつたんだ、と思つた。

なにかが、全部、合わなかつたんだ。

「痛いよう」

それから上緒さんは駐車場で突つぶして、車のドアを閉め切つ

てわんわんと泣いた。

酸素の少なさを感じて、顔をあげた時には、陽はざいぶんかげつていた。占いなんてもう信じないと思いながら、泣きはらした目で図書館の方にハンドルを切った。

サエズリ図書館はいつもよりずっと暗かった。

もう、そんな遅い時間だったつけ。ぼんやりとそう思って気づいた。

月曜日だ。休館日、じゃないか。

ついてない日は、どこまでいったつてついてない。上緒さんは

路上に車をとめて、足を引きずりながらひたひたと、暗いサエズ
リ図書館に近づいていった。

加工ガラスの壁に手をあてると、奥の方で、少しの光が見えた。
事務室は休館日も、やつているのかもしれない。ワルツさんは今
日も、いるのかもしれない。

遠いところにある蛍光灯の明かりは、ひどく郷愁を刺激した。
上緒さんが家を出て働くと言った時、父も母も反対をした。

抜けたところのある、少々頼りないひとり娘だつたからかもし
れない。反対を押し切つて家を出たけれど、ことあるごとに、帰
つてこいと父も母も言う。

帰つてこい。おまえひとりを養うくらいの稼ぎはある。たつた

三人の家族じゃないか。その通りだと思った。大切にしたいし、嫌いなわけじゃない。でも、そればっかりを守つてどうするんだろう。まるで未来がないような言い方だと上緒さんは思っていた。ひとりで生きていきたいわけじゃない。

でも、ひとりだつて、生きていくようになりたい。そういう未来だつて、あるんだと思いたい。

私達は悲しい時代に、寄り添いあつて生まれたのかもしれないけれど。それを忘れて、誤魔化ごまかしながら生きているのかもしれないけれど。

なんにも出来なくとも。どんなに鈍どんくさくても。未来に夢だつて、見たいじゃないか。

ガラスにうつる、上緒さんの充血した目から、涙がひとつぶ、こぼれて落ちた。

「上緒さん」

その時だつた。突然名前を呼ばれて、上緒さんは慌てて首を回した。

裏の方から顔を出して、立っていたのはワルツさんだつた。
休みの日なのにきつちりといつものベストをきて、髪もまとめ
ていた。なにも変わらない顔で微笑んで。

「どうしましたか」

やわらかな声で、上緒さんに聞いた。上緒さんは慌てて闇に隠
れるように目元をぬぐつて。

「な、なんでもないです」

ひよこひよこと、無様な様子で逃げようとした。ワルツさんは泣きはらした上緒さんの顔ではなく、その、中途半端に脱いだパンプスに目をとめて。

「どうぞ」

なんでもないことのように招き入れながら、上緒さんに言った。

「サンダル、また、お貸しますよ」

その声がやつぱり、あんまり優しかったから。

ぐすん、と上緒さんは鼻を鳴らして、頷いた。

サンダルに履き替えて、サエズリ図書館の裏口から通されたのは、地下の一室だった。利用者カードを必要としない、事務室の階段から下りると、関係者以外立ち入り禁止と書かれた重い扉。その奥に、小さな部屋があった。

ワルツさんが自分のカードを読み込ませて扉を開くと、本のそれにまじって、不思議なおいが鼻先をかすめた。薬草のような、苦く甘いにおいだ。

部屋は小さかった。上緒さんの住む部屋ほどもないだろう。壁はすべて木製の本棚で、書庫に近く、それよりももつと雑多に本が並べられていた。ラベルのついた、一目で古いとわかる本ばかりだった。本と本の間にはところどころ隙間もあるし、かと思え

ば奥が見えないほど積み上がっているものもある。数段の梯子になつた台も備え付けられている。

本棚以外には、ランプを模した灯りの載つた机があるだけだつた。
全自动のエスプレッソマシーンのスイッチをいれながら、ワルツさんが言う。

「ごめんなさいね。ちらかつていて」

「ここは……？」

それは整然とした図書室の様子とは違う、不思議なぬくもりだつた。ワルツさんが振り返つて笑う。

「作業室、というふうに、わたしやサトミさんは呼んでいますけど」
ペンや定規をはじめとした文具に囲まれて、置いてあつた本に

見覚えがあつた。土曜日に上緒さんが書庫で壊した本だつた。
外れてしまつた表紙は、ぴつたりとくつついている。

「これ、直つたんですか？」

「ええ、どうぞ、ご覧になつて下さい。まだ糊がかわききつてい
ないかもしませんから、気をつけて」

おそるおそるその本をのぞいて、外れないことを確かめると、
上緒さんは、隣にあつた一風変わつた古道具に目を留めた。

「煙管キセル」

思わず口に出していた。置かれていたのは、年代を感じさせる
煙管の一式だつた。持ち運びが出来る取っ手がついた煙草盆たばこぼんには、
灰皿と刻み煙草が詰められている。上に載るのは細い煙管だつた。

木で出来た持ち手と、真鍮しんちゅうで出来た、火皿と吸い口。すぐそばに古ぼけたマツチもあつた。

「これ、吸えるんですか？」

時代劇のような道具に、思わず聞くと、「はい、吸えますよ」と軽い答え。驚いて、振り返る。

「ワルツさんが？」

こんな時代遅れなものを、と心の中だけで上緒さんは思った。

長年続いた嫌煙けんえんの風潮は、ほとんどの愛煙家を驅逐くぢくしてしまつた。上緒さんの職場でも、男性であつても喫煙者はいない。それをこんな骨董品みたいな煙管でなんて。

ワルツさんは少し困り顔で笑うと、「少しだけ」と小さな声で

言つた。

「本来であれば、図書館に火気は厳禁なのですけれどね」

部屋に入る時にかすかにかおつたのはこの葉が燃えるにおいだつたのだろうか。想像がつかない、と上緒さんは思う。けれどこの部屋は書庫とは別に空調が入っているようだつた。そういう人がいることを、見越してつくられた部屋なのかも知れないと思った。今はそのにおいよりも強く、疑似カフェインのやわらかなにおいがしていた。

♪♪♪♪、と愉快^{ゆかい}な音がして、エスプレッソマシーンが泡立^{あわだ}つた力プチーノを吐き出したようだ。

机の上にマグカップを置きながら、ほつりとワルツさんが呟く。

「アレクサンドリアを忘れるな」

「え？」

上緒さんが聞き返す。ワルツさんは眉を上げ、自分の言葉を誤魔化すように笑みを浮かべると、椅子に座るように促した。

「いいえ。なんでもありません。よければ、どうぞ」

「ありがとうございます」と礼を言つて、上緒さんは小さめのマグカップに口をつける。すでに砂糖とミルクはまぜあわせてあつた。控えめな甘さが、喉^{のど}の奥からしみこんで、ずいぶん喉が渇いていたのだということに、今更気づく。

「すみません、休館日なのに」

「いいえ。ちょっと外の空気を吸いたくて、外に出たところでし

たから」

ワルツさんも椅子に腰をかけ、マグカップを傾けながらそう答えた。

「お仕事ですか?」

休館日なのに。そう尋ねると、ワルツさんは笑う。

「はい。のんびりと」

それから、小さく首を傾げて上緒さんに尋ねた。

「上緒さんも、お仕事ですか?」

問われて上緒さんは「はい」と頷き、そのまま俯いてしまった。

波の震えるマグカップの表面を見ながら、ぽつぽつと、自分はなんだか駄目なんだ、という話をした。

なにをやつても、一事が万事。全部駄目に思えてしまう。
一度そう思い始めたら、世の中のことも、他人のことも、みんな嫌になってしまう。

ひどく詮せんのないことだつた。ましてや会つたばかりの図書館の司書さんに、迷惑なことこの上ないだろう。

けれどワルツさんは嫌な顔ひとつせず聞いてくれた。すっかり上緒さんの弱音を聞き終えてから、慰めることもなく否定することもなく、

「読書がいいですよ」

と静かに言つた。マグカップから顔を上げる、上緒さんに。

「そんな日は、読書がいいです」

勇気づけるように、笑つて。

「嬉しい日の読書は楽しいし、悲しい日の読書も、格別だから、
大丈夫」

大丈夫ですよ。それだけを言ってくれた。

その日上緒さんは家に帰つて、夕食をつまむのも早々に、ソファで本を開いた。数ページ読んで眠つてしまつてから、すっかり放置していたサエズリ図書館の本だ。

綺麗に手を洗つて、ちゃんと座つて。先にトイレも行つておいて。もう一度最初から読み直したら、不思議なほどに、身体に染み

た。眼球を通つて、頭の裏側をなぞつて、喉の奥、それから指先に活字が染みていく。少し厚みのある紙をめくる、その時に鼻から息を吸う。

肺まで届く。これは、物語の中の空気だと思つた。

理解出来ないものは、無理にそうする必要はないのだ。言葉と言葉を追いかけて、不意に現れる光景と感情を、こくこくと呑み込んでいけば、それでいい。

主人公は小さな女の子。その子がゆつくりとひとりぼっちになつていく描写が、自分に重なつた。

可哀想。可哀想なのは誰？

この子かな。つくりものの、誰かなのかな。それとも、私かな。

赤く腫れた目の涙腺^{るいせん}はどこまでもゆるんでいて、ぽろぽろと無様な涙が落ちた。けれどそれはいやな涙ではなかつた。少女が大切なものを失うたび、そして失つたものを、少女が取り戻すたび、あたたかさに胸がつまつた。

遠くまで飛べる、とワルツさんが言つた。その言葉を、囁みしめる。

厚さが増す右手の中と、どんどん失われていく左手の重量。

そして物語には終わりがやつてくる。「オワリ」をかたどる小さなイラストのあとには、作者の短いあとがきがついていた。最後の句点まできちんと読んで、分厚い裏表紙を、仕上げのようにぱたんと置いた。

「ふあー……」

ソファに背中を預ける。ずっと前のめりになつて読んでいたのだといふことに、そこでようやく気づいた。軽い頭痛がする。一日中数字の打ち込みをした疲労に似ていたけれど、同じものではないと思った。

時計は深夜の十二時をまわっていた。

「ドラマ、見逃しちゃった、な……」

こんなことより、やることがあつたはずなんだけど。ぱらぱらと読み終わつた本をめくつたら、冒頭の方に開き癖くせがついていた。なにげなくそのページを見ていて、もしかしたら自分のせいかも、と思うに至る。

このページは最初、開いたまま眠ってしまった時のもの。あの時開き癖がついたのだろうと思って、「ごめんね」と小さく声をかけた。

読むことで、摩耗^{まもる}する。それが不思議だった。電子の形をした雑誌には、決してないこと。

そのまま顔を洗って歯を磨いて。泥のように上緒さんは眠った。自分はひとりきりだ。ひとりきりだけど、本の中、もじやもじや頭の小さな女の子も、ひとりきりで自分の暮らす町を救つたじゃないか。自分はあんな、神様みたいにいい子じやないけれど。ドジだけど。なんにも、出来ないけど。あの子だつて頑張^{がんば}つたんだから。明日から、また頑張ろう。そう思った。

「ワルツさん」

週末の金曜日。今度はちゃんと慎重に車を停めて、上緒さんはサエズリ図書館の中、ワルツさんを訪ねて声をかけた。

「上緒さん」

「先日も、ありがとうございました」

深々と頭を下げる、最初に差し出したのは二回借りたサンダルと、野菜の袋だった。

「これは？」

「両親が突然持ってきたんです。実家の庭で菜園をやつっていて

……。でも、ひとりじゃこんなに食べられないから。おすそわけ
です」

火曜日の朝、両親に電話をかけたらその日のうちに靴と野菜を持ってきた。宅配便でもなんでもなく、自分で車を走らせて。心配性で過保護なお節介せつかい、と早々に追い返したけれど、追い出してからなんだか笑ってしまった。

「迷惑かもしませんが、よければもらってください」

母親のベージュの靴はお古でくたびれていやだなと思つたけれど、少し古い素材がうまく足になじんだ。子供みたいにかかとに絆創膏ばんそうこうを貼つて職場に行く必要もなくなつた。

「そんな、迷惑だなんて」

ワルツさんはまつげをおろして軽く頭を下げた。

「ありがたく、いただきます」

「いえいえ、本当に、うちの親が限度を知らなくて」

「心配なんですよ」

間髪かんぱつをいれず、ワルツさんが言つた。上緒さんの返事を待たずに。

「上緒さんが心配なんです。娘を心配しない親なんて、いませんから」

そう言うから、上緒さんは自然と、首を落とすように頷いた。

ワルツさんは安心したように笑つて、それから上緒さんをのぞきこむように見た。少しだけ不安そうな、心配そうな顔で。

「……本、読されましたか？」

上緒さんは顔をあげ、今度こそ、しつかりと頷いた。

「今、カウンターに返却して来ました。とつても面白かつたです
ぱつとワルツさんの顔に花が咲く。」

「嬉しい」

借りた本が面白かった、ただそれだけなのに。上緒さんの手柄
でもワルツさんの手柄でもないのに、こんなに喜ばれるなんて、
氣恥ずかしい気持ちになつた。けれど嘘でもお世辞でもなかつた
から、上緒さんは重ねて言う。

「また、おすすめの本を教えてもらつても、いいですか？」

「もちろん！ 同じ作者の、よい短編集があるんです。今度は少
し、大人向けの。書庫の本で少々古いんですが、文庫本で持ち運

びも出来るし、是非読んで欲しいんです」

今、書誌データを出しますね、と張り切るワルツさんに、上緒さんが尋ねる。

「あ、ワルツさん、岩波さんって今日も来てらっしゃいますか？」

「いつも通りでしたら、いらっしゃりますよ。お探ししますか？」

「いいえ、大丈夫です」

自分で探してみますから！ と元気よく答え、ワルツさんから書誌のデータを受け取ると、書庫に降りて、渡されたラベル番号と、本を何度も見合わせ探し当てた。時間は、少々かかった。薄い文庫本だと聞いていたから、見逃していたかも知れない。けれど、見つけた時に、この本は自分を待っていた本だと思った。

この森の中で眠り姫みたいに、自分を待つていてくれた本だ、と。ハードカバーではない、薄く軽いそれを丁寧に取り上げて、軽快に階段を上る。

一階の書棚を通って、二階のソファへ。そこに、相変わらず、ツナギを着た岩波さんが座っていた。

「こんばんは」

「はい、こんばんは」

岩波さんは本から少し顔をあげ、軽く会釈する。上緒さんは野菜の入ったナイロン袋を差し出しながら、長い話になつて読書の邪魔をしないように、早口で言つた。

「あの、これ、ありがとうございました」

「ん？」

中身をのぞいて、岩波さんは少し困ったような顔をする。

「礼なんざいらんのに。退屈しのぎの素人仕事だよ」

「いいえ。でも、お詫びと、お礼です」

まだ貸し出しをしていない、小さな文庫本を胸に抱いて、上緒さんは言う。

「岩波さんがああして、私の車を直すと言ってくれなかつたら、
多分私、このまま一生、本を読まないで生きていつたと思うから」

岩波さんは上緒さんの言葉に即座に答えず、胸元の文庫本をさ
して、「……それは？」と尋ねた。

上緒さんは笑う。表紙を見せながら。

「今日借りる、本です」

前に借りた本は、読み終わつたから。そう言つたら岩波さんは、その皺の浮かぶ目元を細めた。

「……面白かつたかい？」

「はい！」

自信を持つて、上緒さんは頷いた。

「……」

その言葉に、岩波さんはゆっくりと息を吐いて、膝にのせた本を閉じた。

「あんたみたいな若い娘さんも、本が好きだといふとはね」
しみじみと、味わうような呟きだった。

「……うちの、娘は、一冊も本を読まずに、死んでいったというのにな」

それは、突然の告白だった。上緒さんは心臓をわしづかみにされたような痛みに見舞われた。あまりのことには、息が詰まるかと思つた。

娘を亡くした、と岩波さんは言つた。この、浅黒く陽に焼けた、
矍鑠かくしゃくとして思慮深い、それでいて手先の器用なおじいさんから、
そんな悲しい言葉を聞くとは思わなかつた。なぜ、とは、上緒さ
んは聞けなかつた。聞いた方がいいのかもしれないと思つたけれ
ど、詳細を聞いた、その後に、かける言葉が自分の中にあると思
えなかつたのだ。

行き過ぎた執心は病だ、という岩波さんの言葉を上緒さんは思
いだす。

この世に病はたくさんある。病に至る悲しみも、この世界には、
本当にたくさんある。

慎重に、何度も深呼吸をして、上緒さんはつとめてやわらかく
明るい声で言つた。

「私、おじいちゃん、ずっと、ずっと前に亡くしました」

私が生まれてくる前に。そう呟くと、「そうか」と岩波さんは、
細めた目元をいつそう細くした。そして、誰に言うでもなく、呟
くのだ。

「生きてるもんは、せめて、立派に、生きていかなきやならんなんあ」

そうですね。そう、上緒さんが言つて、優しく笑つた。その時
だつた。

「どういうことだ!!」

図書館に似つかわしくない怒号が階下から響いてきて、慌てて
上緒さんは、吹き抜けの手すりに撃つかまり、一階のホールを見下ろ
した。中央の貸し出しカウンターの前で、白衣のような服を着て
杖をついた老人が、サトミさんに向けて怒鳴どなちらしているのが
わかった。上緒さんは岩波さんと目を合わせ、ぱたぱたと階段を
おりていく。野次馬やじうまは決していい趣味ではないと思つたけれど。
会話が聞こえる距離まで近づき、足を止めた。

「図書館では、お静かに願います」

「責任者を出せ、と言つてるんだ、地下の書庫のリストもな！」

「利用者登録をお済ませ下さい。利用者カードを差し込めば、書庫に入室していただけます。端末での検索は自由です。貸し出し冊数は五冊まで。貸し出し期間は二週間です」

完全に事務仕事に徹^{てつ}する口調でサトミさんが淡々と告げる。

「それが前時代的だというのがわからんのか!!」

老人が怒鳴る調子を強める。その目元には、特殊な補助スコープがはめこまれていた。先進時代のものらしきそれは、すっぽりと双眼を覆^{おお}う埋め込み式であつたため、彼の視線がどこを向いているのかはわからないが、顔に刻まれた皺や歯の色が、老いの深さを物語つっていた。

どんな場所でもわけのわからないクレーマーがいるということを、社会に出て二年目の上緒さんはよく知っている。そしてその中でも、この客は冷静に相手をするのが辛いタイプだということが容易に想像出来た。

サトミさんは眉ひとつ動かさないというプロフェッショナルぶりを見せて。

「責任者は只今参ります。お待ちのお客様、こちらへ」

老人の斜め後ろにいた自分が呼ばれたのだと、気づいて上緒さんはハツとした。慌てて前に出る。それが、少しでもサトミさんの助け船になればいい。そう思つたのだ。

「あの、これ、貸し出し……」

手に持つた古い文庫本をカウンターに置こうとして、顔を真っ赤^かにした老人に本をひつたくられた。

「あ、ちょっと!!」

なにするの、と声を荒らげようとした時だつた。それより大きな声に、かき消された。

「お前、これがなにかわかっているのか!!」

老人は穴があきそうなほど文庫本に目を近づけ、その文字をスキヤニングする動作をした。身分証を読み取つたものと、同じシステム。そして、囁みつくように上緒さんへ言う。

「この本の価値をどれだけ知つてゐる。戦前の廉価^B大衆本、しかも初版だぞ、原版はすでにこの国から消えた、実物でも完本はほ

「ほ見つかっていない！ それを、お前みたいな子供が軽々しく扱つてもいいと思つていいのか!!」

今にも血管を切りそうな剣幕に上緒さんはたじろぎながらも、同じように頭に血をのぼらせそうになつた。もう少し上緒さんが俊敏しゅんびんだつたら、なにか反論を口にしていたかもしだれない。けれどその時、外から慌てて入つて来たのは、普段図書館の駐車場に立つてゐる警備員だつた。

「お客様、落ち着いて。向こうで……」

とにかく向こうで話しましよう。そう促す警備員を、老人は杖を振り上げて振り切る。

「私に触るな!!」

高齢の警備員はバランスを崩して尻をつく。顔を歪^{ゆが}めたので、上緒さんはひやりとした。先に立ち上がっていたのはサトミさんの方だった。座り込んで警備員をいたわりながら、ひどく冷たい口調で、

「警察を呼びます」

そう呟く。返ったのは嘲^{あざけ}るような笑いだった。

「かまわんぞ、あんな奴らになにが出来る！ 私の顔と名を見て、手などだせるわけがない！ こんな狂った施設、今すぐ閉鎖させる必要がある!!」

狂っているのはどちらの方だと、上緒さんが頭に血をのぼらせたまま口を開きかけた、その時だった。

「図書館では、お静かに願います」

パンプスのかかとを軽く鳴らして、地下から現れたのはワルツさんだつた。サトミさんよりももつとずっと、落ち着いた声だつた。館内に張り詰めていた緊張が少しだけゆるみ、その分老人のささくれた苛立ちだけが募つたのが、そばにいた上緒さんにはわかつた。

真っ直ぐに歩いて来たワルツさんは、老人に手をさしのべて。

「失礼ですが、お客さま。その本はわたしがそちらのお客さまに資料案内リファレンスしたものです。貸し出しを希望される場合、予約の申し込みをしていただくことになります。身分証をご呈示いただけますか？」

淡々とそう告げた。

「なんだ、こいつは」

老人は、カウンターのサトミさんよりもずっと若いワルツさんのことを、不可解なものを見るように睨んだ。

「責任者を出せ、とおつしやつたでしよう？」

わたしがサエズリ図書館の代表です。

淡々と起伏のない声で、それだけをワルツさんは告げた。

「代表、だ？　お前のような……」

続いたであろう罵倒^{ばとう}の言葉を遮^{さえぎ}るように、ワルツさんが言葉をすべりこませる。

「身分証をご呈示下さい。聴覚補助のためのデータ通信機が必要

ですか？」

老人の灰味がかつた肌が色を深くした。お前の耳は聞こえないのか。そう尋ねているも同じだった。実際、視覚には補助のスクープを当てるのだから、強烈な嫌味になつたようだつた。骨の浮いた手が、カウンターを叩く。

「貴様のような、ものの価値のわからん人間が責任者だから、このような文化の冒瀆ぼうとくと虐殺ぎやくさつがまかり通るのだ……！　なにが代表だ、責任者だと!?　貴様のような小娘が、戦前B.P.の、純然たる『紙の本』の価値を、どれほど知つている！」

つばを飛ばさんばかりの老人の言葉にくらべて、ワルツさんは静かに言う。

「リストの閲覧を、ご希望でしたね」

サトミさん、書庫のデータを。その言葉を予測していくように、サトミさんがすみやかに手元の端末画面を、机と平行にした。

立体ディスプレイにうつしだされるのは膨大な量の書誌リストだつた。老人がスコープのつまみに触り、ディスプレイと同期させれば、息をのんだのが気配だけで上緒さんにはわかつた。

ワルツさんはかつて利用者案内を行った時のようになめらかな口調で、老人に告げる。

「書庫に配架された戦前の書籍はおよそ十二万五千冊。その中でも廉価大衆本は半数以上に及び、完本の電子データが共有ネットワークに存在せず当館のみのものだけでも四万冊。また、状態の

悪さなどから閲覧のみとなつてゐるものに關しては一万二千冊。
その中には、ヨーロッパで一五〇一年以前に活版印刷された初期
ナブラ印刷本も數冊有しています。これらはすべて、すでに値段のつけ
られるものではありません」

ですから、わたしにはこの図書の価値を、測ることは出来ない。
淡々と述べた後、ワルツさんは真っ直ぐに老人を見た。

「それが、この図書館です」

ワルツさんが言い終えても、背後の立体ディスプレイにはまだ、
データが流れ続けていた。高速で浮かんでは消える、泡のような
それらの文字が、ものの価値もわからないとされる上緒さんをも
圧倒した。

老人の、歯ぎしりをする音が聞こえるようだ。

「——ふざけるな!! たとえ電子データを保存していたとしても、
やすやすと人の手に貸せるものではない、すでに大部分が失われ
た、貴重な文化財だぞ!! それを知つていながら、なにを思つて
こんなもの……!」

老人は怒るよりも嘆くように、ワルツさんに詰め寄った。
なげ

「この百年、たつた百年だ！ どれだけの本が焼かれ、どれだけ
の本が消えた!? そしてどれほどの人間が、こうした本を求め、
手に入れられぬまま——……。」

まくしたてられる言葉にも、ワルツさんはひるまなかつた。
「借りたい人がいるからです」

真っ直ぐにその、黒い補助スコープのついた目を見て、言つた。

「読みたい人が、いるからです」

「……貴様のような小娘に、なにが——!!」

また、その震える拳を振り上げようとする。ひやりと嫌な予感がして、上緒さんは声を上げた。

「ワルツさん!!」

サトミさんはすでに、警備員さんを連れてその場からいなくなつていた。ワルツさんを守る人は、誰もいない。

しかしその声に、先に反応したのは老人の方だ。

「……ワルツ?」

低く、絞り出すような声で、信じられないとでも言うように、

静かに言つた。

「ワルツ、だと

補助スコープのついた目は動かすことがかなわず、壊れた人形のようすに首を振りながら、老人は言う。

「ワルツが、どこに

その声は震えていた。杖を握る手もまた。おびえるように、惑うように。

なにかを悟り、「やつぱり」と囁くような声で、ワルツさんは言う。

「父を、ご存じなのですね」

そこでようやく、老人はワルツさんの胸元、そのネームプレー

トに、顔を近づける。ゆっくりと、スコープの焦点を合わせる、
沈黙の時間が流れ。

「馬鹿な^{ばか}」

かすれた呟き。それから。

「ギショウに娘などいなかつた!!」

突然、激高したように叫んだ。その激情のまま、囁みつくよう
に言う。

「貴様どこの馬の骨だ！ ギショウの財を、あいつのコレクショ
ンを、かすめとつて食いつぶす気か！」

「ワルツさん」

その時低く、大きな声が響いた。上緒さんが振り返れば、立つ

ていたのは、岩波さんだつた。

「そいつを叩き出さないか。わしはもう、我慢がまんがならんぞ」

岩波さんは、肩をいからせ何度も自分をなだめるように深呼吸をしながら、恨みのにじむような深い声で言つた。

「ここは、あんたの図書館だ。それくらい、しても構わんのではないかね」

「岩波さん……」

ワルツさんが、そこでほんのわずかに戸惑う表情を見せた。

「ふざけるな」

老人はわなわなと身体を震わせながら吐き捨てた。

「全力で潰してやる。どんな手を使つてでも、私の残つた、すべ

ての財で、この図書館を買い取るぞ!!　いいか、こんな冒瀆は許さない。ギショウの形見は、詩の一篇たりとて誰にも渡さぬ!
「いっぺん

ここにある図書はすべて、しかるべき場所で、施設で、厳格な管理をされなければならないものだ!!」

狂氣じみたその言い方にも、ワルツさんは動じることがなかつた。

「いくら積まれたとしても、図書館はお譲り出来ません」

それだけの、返答。会話をするつもりもないようだつた。

ワルツさんは優雅ささえ感じさせる仕草で腕を伸ばす。

「お帰りはそちらから」

扉を手の平で示しながら、薄くまぶたを下ろして。

「その前に、お持ちの本を、お置き下さい」

老人はまだ、上緒さんから奪つた文庫本を手に持つたままだつた。せせら笑うように、肩を震わせ、言う。

「いやだと、言つたら？」

「許しません」

ワルツさんの返答ははやく、どこまでも迷いがなかつた。

静まりかえつた図書館の中で、かすかなクラシックの音だけが彼女を包む。

歴然とした事実だけを白いあかりに晒すように、怒りも憤りも慢心もなく、ただ真っ直ぐに老人を見て。

ワルツさんは、静かに告げた。

「わたしはこの図書館の特別探索司書。あなたがサエズリ図書館

の本を持つ限り、地の果てであっても追い続けます」

その気迫と、迷いのない言葉に、老人はたじろいだようだつた。けれど、強がるように頬をひくつかせて、「特別探索司書、だ？」とワルツさんをあざわらう。

「そんなものの、前時代の崩れかけた遺物だろう。こんな小さな図書館の脆弱なネットワーク、ウイルスで潰すまでもなく、ケーブルの一本切つてやれば作動はせんわ。もう、ネットワークが万能であつた時代は終わつたのだ」

それは確かだつた。マザーサーバーはいつまでも復旧されず、地方サーバーの不調やアクティブウイルス、システムのバグ、もつと原始的な、電力の供給不足で、ネットワークは度々に落ちる。

極端に技術者も減つた今では、メンテナンスもままならない。一部が落ちれば、全体への影響も出る。

けれど次に笑うのは、ワルツさんの方だった。

「その程度で、割津義昭よしあきらの記憶回路ネオメモリと、通信ネットワークを停止できるとお思いですか？」

彼女は再び宣言をする。誇りをもつて。己の存在と役割を。

「わたしは割津唯。この図書館の、特別探索司書です」

それが一体、どのように老人に響いたのか。ワルツの名前を最初に聞いた時と同じように、どこか途方に暮れたように立ち尽くして。

「……まさか」

かすかな声で、老人は囁いた。

「お前が、ギショウの」

それ以上は言葉にならなかつた。ワルツさんはゆっくりと、老人に歩み寄り、静かな動作で、手をさしのべる。

「本を、返して頂けますか？」

ワルツさんの発した、どの言葉が、果たしてどんな作用をもたらしたのか。上緒さんにはわからなかつた。けれども、老人からは、これまでの激情の火がおさまつていてるように見えた。ゆっくりと震える動作で、本をワルツさんの手の中に返して。

「本当に、ギショウの、娘なのか」

老人の言葉は、糾弾きゅうだんでもなく、まるで懇願の

ようには図書館に響いた。そんなはずがない、という意味でさえないと上緒さんは思つた。

「本当にあいつは、生きている間に、家族を、手に入れられたと
いうのか」

そうであつたら、どんなにいいかと、すがるようだつた。

対するワルツさんは、そつと綺麗なまつげを伏せて。

「アレクサンドリアを忘れるな」

いつか、上緒さんが聞いた言葉を、もう一度、告げた。

老人が息を呑むのが、上緒さんにもわかつた。ほんのわずかに泣きそうな顔で、ワルツさんは淡く、笑う。

「パパの、口癖でした」

なくしたものを感じるよう、ずっと大切にしていたものを明かすように、ワルツさんがそう言えば、老人は、不自由な動作で、自分の目元に指を押し当てた。そうしてこぼす、言葉は。

「……薄情者が」

その場にいた、誰に対するものでもないように、上緒さんには思えたのだ。そこにいた誰でもない相手をなじる言葉は、空中に溶けて、消える。

なだめるように、いたわるように、ワルツさんが覗き込んだ。

「お客さまが、父と、父のコレクションを、大切に思つて下さつていることは、よくわかります。……でも

でも、ごめんなさい。

ワルツさんは小さな子供に言つてきかせるように、静かな声で言つた。

「パパの本は、全部、わたしがもらいました」

顔をあげる、老人は。打つて変わつて弱々しく、ワルツさんに、両手を伸ばし、すがるように、言う。

「わかつているのか。……このままでは、この世界は」

震えている。その震えが、なんなのか。上緒さんにはわからない。けれど確かな恐怖を、皺としみの浮かぶ表情にうつして、絞り出すように言つた。

「本は、死ぬのだぞ」

それはまるで、助けを求めるような声だった。

ワルツさんは胸に本を抱いて、安心させるように、迷いなく告げた。

「本は死にません」

美しく、微笑んで。当然のことのよう言うのだ。

「だって、みんな、本を愛していらっしゃるでしょう？」

人類の歴史上に書物が登場して数千年の時が過ぎた。紙という伴侶に行き着くまでに糸余曲折を経たが、長きに亘り、本はそれ自体ひとつ完成形として人間の傍らにあつた。それから、電子元年と呼ばれる区切りを何度も迎え、けれど本が消えることは

なかつた。

ひとつの極限である、本が消えることは決してなかつたのだ。
変わつたのは、価値と意味。それだけのこと。

上緒さんは、借りる文庫本を岩波さんに預けると、サエズリ図書館を飛び出す。ふらつく足取りで、濡れた猫のようにうなだれながら肩を落とし、サエズリ図書館を出て行く背中を追つた。

図書館は閉館時間が迫つていた。本当はワルツさんが追いかけたかったに違ひない。けれど、ワルツさんは他の客の応対をしなければならなかつたから。

上緒さんは声を上げた。

「おじいさん！」

駐車場に置いてあつた車には運転手がいるようだつた。その扉が、触れるだけで開く。上緒さんの乗つているような自動車ではない。自家用車という言葉を使用しなかつた先進時代の個人車（プライベートカー）だつた。それ一台でも、家が十軒買えるほどの値段だ。

乗り込む前に、ゆっくりと上緒さんを振り返つた。

「あの、あの……っ」

自分の言おうとしていることが余計なことなのだろうという自覚は、上緒さんに十分にあつた。だから、躊躇つた。

けれど老人は、吐息のように小さな声で言うのだ。

「すまなかつたね」

思わず上緒さんは目を見開いた。

「……失礼を、した」

頭を下げる。紳士的な仕草だった。本当に心の底から、詫びて
いるようだつた。その背がなんだか一回り以上、小さくなつてしまつたようだつた。

上緒さんは唐突に胸が詰まつて、早口で告げた。

「あの、おじいさん、サエズリ図書館は、カードさえあれば、誰
だつて借りられるんです。だから、いつでも来て下さい！」

ワルツさんならきっと、こう言つたであらうと思つて。

けれど、老人は笑うだけだつた。唇の端をほんの少しだけ吊り
上げて、自嘲するように言葉をこぼす。

「ありがたい申し出だがね、お嬢さん。……私の目では、本は、

もう、読めんだ」

上緒さんは驚いて、顔を上げた老人の、黒いスコープを見た。それから、先ほどの、文字を読み取るような仕草を思い出した。彼のスコープは最新式のようだつた。単純な視力矯正ではなく、映像をデータとしてスキヤニングする。それは個人車と同じように、確かな富裕の証^{あかし}でもある。けれど、「悔しいもんだよ」と老人は泣き笑いの表情でこぼすのだ。

宙を見る、老人の横顔に、浮かぶのは遠い憧^{あこが}れだつた。かつて多くの人が、今でもきっと、一握りの人が、憧れを抱いて、本を求めたに違いない。

「若い時に、あれほど夢見た読書だよ。十二分に金を稼いで、本

を集めて、耽溺^{たんのき}するつもりだつた。いつか互いの蔵書を自慢し合おうと、約束をした、友もいた」

上緒さんにとって、サエズリ図書館が、生まれてはじめて入る図書館だつた。

しかし、図書館に入つたことがある同級生が、果たして何人いるだろう？ そこで本を借りたことがある人間が、上緒さんの友人の中に入るだろうか。

学校には図書室があつた。

けれど、そこにおさめられた図書は、まるで標本のようにケースの中にいれられ、手袋をした教師が、うやうやしく扱うものだった。

本が安価で、万人のものであつた時代は終わつたのだ。

「データならばある」と老人は言つた。

かつて、石板は本へと形を変えた。同じように本もまた、変化の道をたどつただけだと言う人がいる。

「自宅のネットワークならば、どんな電子書籍でもリーディングは出来る」

彼のスコープはやはり、読み込みの機能も有しているのだろう。脳に直接データをたき込むことさえ可能であるはずだつた。

車に乗り込みながら空に嘆くように深い深い息について、老人は言う。

「けれど……私は、本が好きだったんだよ」

上緒さんには、かける言葉がなかつた。

はじめて本を読んだ上緒さんだ。最初は印字された文字が味気なく感じられて、退屈で眠つてしまつたほどだ。本を好む人なんて、それこそ先生か、研究者か、よつほどのお金持ち。好事家だと。

けれどそれを好きな人がいる。今でも、どれほどそれが手軽さを失つても、本を、読みたい人がいる。

行き過ぎた執着は、病だ。

彼はそうなのだと思う。よつほどの、と言われるほど、病と言われるほど。本を、愛していたのだ。

「お嬢さん、本は好きかい？」

ぽつりと、助手席に座つて、うなだれたままで老人は、上緒さ

んに聞いた。

上緒さんは迷う。ワルツさんのように、岩波さんのようにはいかなかつた。自分の気持ちが、どこまで老人の言葉に釣り合うのかは、わからない。

それでも、上緒さんは言つた。

「わかりません。でも……面白かつた、です」

「そうか」と老人の声が、ため息とともに吐き出される。そして、小さな頷きとともに。

「……そうだな。そういう人に読まれた方が、本も、幸せなのかもしれん」

個人車のドアが閉められ、シートベルトが全自动でかけられる。

窓だけが開いて、老人はここまでついてきた上緒さんに、一言告げた。

「よい読書を。さすればギシヨウも……私の友も、喜ぶだろうよ」

最後の言葉を、もつと深く尋ねてみたかったけれど。

そのまま老人は、車を進めて、夕焼けの中へと消えていく。紅色に染まる緑樹の合間を縫つて。もう、彼を追うすべはないのだと、佇みながら、上緒さんは見送った。

「アレクサンドリア、つてなんでしょう」

それからしばらく後、サエズリ図書館で岩波さんと再会した上

緒さんは、館内のソファに座つて、隣にいる岩波さんに尋ねた。

ワルツさんとはあれから図書館に来るたび会っていたが、先日の騒ぎの話題は出ることはなかつた。なんと尋ねていいのかも、上緒さんにはわからない。

ひとりごとのような問いかけだつたから、答えは返らないかと思つていたが、岩波さんは開いた本から顔をあげず、ぼそぼそと答えた。

「アレクサンドリア図書館のことじやないかね」

首を傾げる上緒さんに、岩波さんは重ねるように説明をしてくれた。

「古い図書館だよ。紀元前の昔に、貴重な文書とともに焼け落ち

たとされている」

無知である上緒さんはぴんとこなかつたけれど、アレクサンドリアという名前の図書館があるのならば、それは間違いがないのではないかと思つた。

その言葉に込められた意味までは、わからないけれど。

ここは図書館なのだ、と並ぶ本棚眺めながら、嗜みしめるよう上緒さんは思う。

前時代の遺物だといった、老人の言葉はとても正しい。本来であれば、一介の個人が所有できる財ではなく、管理出来るような代物でもない。たとえば上緒さんには、岩波さんの持つ全集の一冊が、どれほどの価値をもつのかさえ、わからない。

それでも、この建物は図書館として建てられ、図書館として、息を、している。

「……あの、岩波さん。ギショウ、つて」

次の問い合わせに対する答えは、もつと明確なものだつた。

「この図書館の創設者のことだろう。割津義昭よしあきら。地下の書庫にある蔵書は、彼が個人的に集めたものとして、義昭文庫と名前がついている」

そこではじめて、上緒さんは心の中でギショウ、という文字に漢字を当てることが出来た。あの、地下の書棚。そこに彫られた、名前。ぬくもりを感じる、眠るように配架された、古書達。

「ワルツさんの……お父さんだつたんですか」

「確かにことはわからんよ」

岩波さんはもう一度、そう前置きして。「高名な科学者であり脳外科医だつたという記録はあるが」とぽつぽつと言つた。

その記録には、生涯妻をもたなかつたと記されていたとも。

「脳外科医……」

思うところがあつて、上緒さんは呟く。その、義昭といふ人と、ワルツさんの本当の関係については、わからない。わからないけれど、これほどの本を、ワルツさんは与えられて。ワルツさんは、これらの本のすべてを、自分の宝物だと言う。

「ワルツさんがいなければ、わしらはこんなにも本は読めなかつた」愛おしそうに広げた本をなぞりながら、岩波さんは言う。

「感謝せねばな」

そうですね。心の底から、上緒さんは同意する。それから、「今日借りる本を探してきます」そう言つて、立ち上がる。
別れざま、「上緒さん」と岩波さんが呼び止めた。

振り返ると、岩波さんは顔を上げて。

「よい読書を」

そう言うから。

「はい」

上緒さんも笑つて、同じように、言葉を返した。

「それでは、よい読書を」

さえずり町と呼ばれる街がある。

緑に溢れたのどかな街には、そこに似合いの美しい図書館が
つて。

美しい図書館には、そこに似合いのとびきり素敵な司書さんが
いる。

そうしてその、図書館には、今日も誰かが。
本を愛する、誰かがいるのだ。

第一話

サエズリ図書館のカミオさん

終

あとがき

私達は長い間、治らぬ病にかかっています。

それは、「いつか本がなくなつてしまふのではないか」と思い悩む病です。

不思議なことに、この病は本が好きな人しかかかりません。本を愛する人だけが、怯え、危惧し、未来を悲観し、感います。本に馴染みのない人達は、ただの時代の流れとして、振り向くこともありませんでした。

私自身は、本の死をおそれたこともあつたけれど、「そんなは

「ずはない」と思つていました。何度訪れる「電書元年」も、本を駆逐する事など出来ない、と。

けれど、二〇一一年の春、この国をおそった震災の中、もしかしたら、本はなくなるのかもしれない、と思いました。もちろんそんなことはなく、未来のこと、わからないけれど。混乱と不安の中で、今、この物語を書きたいと思いました。

おだやかで、やわらかな、サエズリ図書館のお話を。
そしてそこに生きる、本を愛する人の物語を。

私が図書館に勤務していたのは、しばらく前の事です。
毎日愉快に忙しく、本に囲まれ働きながら、「探している本が

どこにあるのか、手に取るようにわかれればいいのに」と思つていました。ワルツさんが出来上がるきっかけはそんなささやかな願望でした。なかなか書く機会に恵まれず、あたため続けてきたのですが、星海社さんの「最前線」というWEBサイトを拝見した時に、この物語にふさわしいのかもしれないなと思いました。

文芸の最前線たる、WEBサイトから。一冊の本を、お届けしたいと。

本が出来上がるまで、根気強く物語と向き合つて下さった、星海社の山中さん、イラストを引き受けて下さった、simeさん。本当にありがとうございます。

サエズリ図書館と、ワルツさん。もつたいないほど美しい本に

なりました。

物語は、何度も、問いかれます。

電書ですか？ 本ですか？

彼女達は、何度も、答えます。

やはり、本です。

これは、その理由を語り続ける、シリーズです。

二〇一二年七月 紅玉いづき



星海社
FICTIONS

としょかん
サエズリ図書館のワルツさん 1 PDF Edition

2012年8月16日発行

著者 ————— 紅玉いづき
©Kougyoku Iduki 2012

イラストレーター ————— sime
フォントディレクション ————— 紺野慎一
カバーデザイン ————— Veia

発行者 ————— 杉原幹之助・太田克史
編集担当 ————— 山中 武

発行所 ————— 株式会社星海社
〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル4F
TEL 03(6902)1730 FAX 03(6902)1731
<http://www.seikaisha.co.jp/>

本データの閲覧以外の目的での無断使用は、著作権上での例外を除き禁じられています。

続きは『サエズリ図書館のワルツさん 1』をご購入ください。